

## コンコーネ 50 番の歌唱法

田 中 千 義

### A Singing Method for Concone No, 50

Chiyoshi TANAKA

(Received May 25, 1992)

#### はじめに

Giuseppe・Concone (1801~1861) は、イタリアのトリノに生まれ、作曲家・歌唱教師・歌手・オルガン奏者として活躍し、オペラも二曲作曲している。1837~48 年は、フランスのパリで声楽とピアノを教えていたが、この時 5 巻の歌唱教則本を書いている。50 番は、その中の一冊で、他に 25 番、も有名で、学習によく用いられる。

この 50 番の中声用は、オリジナルであり、声楽を学ぶ者が、その技術を高める為に用いる、あらゆる声種に最適の教材である。

イタリア人であるコンコーネは、この明るい優美な旋律をもって、歌う者に自然な明るい声の真のレガート唱法を修得させ、更にベル・カント唱法へと導いてくれる。

学習者は、デュナーミク、アゴーギグ等の指示をよく守り、機械的な音符の長さ、高さを保つだけでなく、伴奏をよく聴いて、曲全体の作曲家の意図を理解し、あたかも歌の詩があるかのように歌い、その成果を上げたい。伴奏を弾きながら歌う事が、曲の真の理解を深める。例えば、14 番の、マルカートな部分は、自然にそのように歌いたくなるであろうし、7 番は、柔らかな声を使いたくなる筈である。伴奏音を弾いた時、歌いたくなる気持ちが、湧き上がって来るように、音楽に対する感受性が培われていて欲しい。学習者は、歌詞の無い旋律を、如何に音楽性豊かに表現するかであるが、そのヒントは伴奏音にある。なだらかな三連符の連続はしなやかな旋律を、また強音のスタッカートでの音の中断は、激しい感情の表現と読みとれる。具体的な歌い方としては、ドレミ唱法と、一つの母音での唱法であるが、学習者によっては、後者の唱法は注意を要する。一つの母音で歌っていると、顎に余分な力が入りだし、次いで喉頭にまで力が入ってしまう例である。個人差が大きいので、指導する場合、学習者の口形・咽喉の状態をよく観察しながら、どの方法を取るか決定、又は変更せねばならない。またプレス記号を省いて二息分を一息で歌う場合、カッコ付きのプレス記号でも、必ずプレスさせねばならない場合など、その個人に合わせた指導が必要になる。平行して、横隔膜での支えが、充分行えるよう発声訓練を積み、息が長く使えるようにする。声区の滑らかな移動を練習する場合、そのフレーズを取り出して、部分練習をイタリア語 7 つの母音で試みる。a, e, ε, i, o, u, のいずれも、口・舌の形状を観察しながら行う。歌い易い母音、歌い難い母音は、それぞれ個人により異なるので、より容易な母音から始め、或いはその歌い易い母音のみで練習する。各曲の速度標語に注意して、伴奏を弾き、それぞれの曲の意図するものをよく掴み、時間を掛けて反復練習し、声の使い方を考え、各音符に息吹きを与えるように、旋律を楽しみながら歌いたい。重要な部分、注意すべき部分の歌い方を述べ

る。

1. 初めのフレーズは、音階を上昇するだけのものであるが、声のバランスをよく保って、声区の変りめをうまく通過出来るようになるまで、慎重に練習する。4小節目が *cresc* にしてあると歌い易いと思われるが、*cresc* とすると、多くの場合 *change* しない声になる。また *dim* を意識し過ぎると、声が萎縮してしまう。2小節目の終わりで、正しく横隔膜を支え、4小節目の1拍目を目指して *cresc* して、2・3拍目は、その余力で上昇すると考える。またレガートに歌う。11小節目から12小節目のミに上昇する6度の音程は、咽喉が固くならないように、10小節目の休符でよく息を吸い、横隔膜の支えを確実に、しかし力を入れ過ぎないようにして歌う。15小節目は、著者により *cresc* だったり、*decresc* だったりするが、*cresc* が自然であろう。23小節目の音量の脹らみは、2拍分や *cresc* して、3・4拍目で次第に声を弱めていく。曲全体易しく思われるが、*cresc*・*decresc* をよく考えて、慎重に歌い訓練の効果を上げたい。
2. 最初のソを *cresc* しながら4拍延ばし、その音量で2小節目のラを発音し、その直後に *dim* に掛かる。同様に3小節目のラから4小節目のシを声区の *change* に気をつけながら、レガートに歌う。6小節目のドは、声に力みがあると *dim* にくいので、力み過ぎないように歌う。9小節目のレが、地声にならないように、鼻腔の響きもおろそかにしないで、澄んだ響きの声を使う。16小節目のミは、声が固くならないように、14小節の終わりのプレスを力み過ぎないように、適度のプレスにする。力み過ぎは *dim* を困難にする。また高い音なので、13・14小節目のミ・ドと声の質が変わり過ぎないように、声を滑らかに *change* 出来るようにする。
3. 2小節目のソを力み過ぎないように、や *cresc* 力を入れて、上のドに柔らかく上昇する。5・6小節目のアクセントは強過ぎないように。10・20小節目のソからドへの跳躍が固い声にならないように歌う。24小節目のミは響きを大切に、自分の声をよく聴きながら練習する。25小節目から26小節目のオクターヴを滑らかに、特に注意する。37小節目のドの脹らみを、丁寧に歌う。17・39小節目のシは、声の下の響きを鼻腔に感じ取るように歌う。力み過ぎて、いわゆるノド声にならないように歌う。
4. 9小節目から、4小節と2拍、合計14拍の間徐々に *cresc* するが、初心者は(V)のプレスを入れてもよい。プレスを入れないと、14小節目のミが、息不足の為苦しい声になってしまう場合がある。17小節目の16分音符はレはドより大きくならないように、レは軽く次のドをレより少し強く歌うようにする。付点8分音符と16分音符の跳ねるリズムを、3連符の二分と一分のリズムにしては、練習にならない。正確に跳ねるリズムを、咽喉のコントロールでよく出来るようになるまで、何回も練習する。一般的歌曲に適切に役立つであろう。
5. 伴奏の3連符の流れに乗って歌っていく、という気持ちが大切であろう。2・4・26・28小節目の *cresc*, *decresc* は丁寧に。5・6小節目のオクターヴの跳躍は、上のレがこぼれた声にならないように、力まないで歌う。20小節目のオクターヴ跳躍も、3拍目のドが唐突な感じの発音になったり、アクセントの付いた声になったりしないように、柔らかく上昇出来るように練習する。22・23小節目は、横隔膜の支えを更に確かにして大らかに歌う。ミが歌い難い、または咽喉に力が入り過ぎる場合は、22小節目3拍目から、他の歌い易いと思われる母音に変えて歌う。また咽喉をよく開いて歌うようにすると、効果を上げられる筈である。
6. 1・2小節目の *cresc*・*decresc* は確実に、しかし大袈裟にならないように。3小節目2拍目 *cresc* して、4小節目に向う時、支えをよく意識して、しっかり歌う。*Moll* の為、声が下がり気味になったり、力を入れ過ぎて声が上ずったりしないように注意する。44小節目まで *Moll* で、45小節

目から *Dur* になるが、*Dur* の感じをよく出すように歌う。53 小節目から確実に 2 小節 *cresc*、2 小節 *decresc* するが、より自然な感じで行う。終りのラは、下のラを歌う場合も、胸のみでなく鼻腔の響きも意識して、快い響きの声になるように歌う。

7. 伴奏の 3 連符を自分で弾いて、この旋律の流れを上手く乗せて歌うというように考える。複付点音符の次の 16 分音符が遅れないように、また早過ぎてもよくない。3 小節目の 2 拍目 3 連符の 2 番目の音ラが、伴奏音とよく一致するように注意する。6 小節目は、初心者にとって、ほとんどの者が練習を多く積まねばならない。2 拍目のブレスは、直前の 8 分音符を早めに切り上げ、3 連符 2 番目の 8 分音符の出が遅くならないように、息の練習と思って訓練する。4 拍目のナチュラルは、人によっては難しい。*C dur* の楽譜でナチュラルは無いと思って歌うとよい。13 小節目 4 拍目のアクセントは、あまりに強過ぎないように、旋律の感じで程よくアクセントを付ける方がよい。16 小節目は、フェルマータの後も *rit* を掛けて *dim* する。20 小節目 2 拍目は、音程をより気を付けて歌う。22 小節目 2 拍目も同様に注意して歌う。22 小節から終りまでのブレスは、よく息を支え、穏やかな感じで歌い終えるように練習する。

8. 落ち着いた気持ちで、穏やかな歌い方を、しかしあまり重い感じにならないように。8 小節目のドは、ブレスの後なので、あまり多く息を吸ってしまうと、音高が不安定になるので、程よく息を吸って音を外さないように注意する。19 小節目の装飾音は、咽喉に力が入り過ぎないようにして、声をコントロールする。17・18 小節目と 21・22 小節目のファの脹らみは、大き過ぎないように。26・30 小節目の音程は、自分で伴奏を弾きながら、正確に音を取る。28 小節目 3 拍目のドは、フレーズの終わりの音なので、強い胸声にならないように、柔らかく歌う。38 小節目のアクセントは、力を入れ過ぎて、音程が悪くならないように注意する。40 小節目から 5 小節掛けて *dim* するが、声量の自然な減衰を慎重に行う。

9. この曲を歌う前に準備として、一つの音を息いっぱい持続する発声練習をする。声は中位のボリュームで行う。この曲は、息を長く使うのでスタミナを要する。横隔膜の支えが大へん大事になる。10 小節目のアクセントは、唐突な感じにならないように気を付ける。強すぎるアクセントは、この旋律にそぐわない。23 小節目 3 拍目のシは、フレーズの終わりに近いので、静かに上の響きを失わないように歌う。30 小節目のファに向かって上行 *cresc* するが、荒い声にならないように、声の響きを鼻腔に通すようにして、力強く上昇する。30 小節目 3 拍目からの *smorz* は、少量のブレスで歌う。息を吸い過ぎると、声の安定を失う場合がある。

10. 曲を歌う前に、歯切れよい活気に満ちた声で、発声練習をしておく効果がある。4 拍目に付点 8 分音符と 16 分音符の音型があるが、16 分音符は支えを意識して、身体全体で身軽にリズム感よく歌う。咽喉のみのコントロールでは、練習は充分といえない。17・18 小節のミは潑刺とした声で、思い切りよく歌う。22 小節目のアクセントは、*forte* で思い切りしっかり歌うが、力の入れ過ぎは、音高の上ずりになるので注意する。27 小節目 4 拍目から、次のラは、中音域の為、息が抜け易いので、息の支えを疎かにしないで歌う。

11. 曲の指示は *Cantabile* で、しかも *dolce* とあるので、柔らかく旋律を歌い上げねばならない。2・4・6 小節目の 2 拍目は短くなりがちなので、正確に 1 拍分取る。9・10 小節目の音型は、8 分休符でブレスして、次の 2 分音符の *cresc*・*decresc* は、少し脹らむ程度にする。極端な *cresc*・*decresc* は、この曲に合わない。25 小節目から 28 小節目までは、柔らかく響く声質の *forte* になるように、声の色あいに気を付けて歌う。33 小節目から 36 小節目のフレーズは、*pp* で歌い出し、35 小節目の脹らみは最大 *p* と考え、*pp-p-pp* と歌う。36 小節目のレは、急に強くならないように練習する。64 小節目 3 拍目から終りまでは、息が抜けてしまいがちなので、声の響きを鼻腔に

軽く掛けるだけという気持ちで歌う。

12. 複付点4分音符の次の16分音符は、確かに支えを意識しながら、咽喉のコントロールよろしく歌えるように。付点8分音符と16分音符のリズムも同様に、支えと咽喉の動きが適切になるように、付点音符の余力で16分音符を歌う。6・18小節目の下行のリズムは、連続したリズムのためか、音程が狂いがちなので、音高にも注意して練習する。28小節目のアクセントは、適当な力の入れ方で歌い、次の29小節目のドの脹らみを丁寧に歌う。31小節目のミは、大いに充実した声で脹らみを持たせる。36小節目から37小節目は伴奏音が無くなるので、下り気味に音程が狂いがちである。音程によく注意しながら歌い、終わりのソの音高をピアノで確かめる。43小節目から終わりまでは、曲に慣れてきた段階で、一息で歌って息の支えの訓練をする。

13. 流れるように歌いたいのが、音が上下に動きのある旋律なので、咽喉のコントロールが、一段と慎重でなければならない。滑らかな動きの発声練習で準備しておく。4小節目の16分音符の上行は、そのまま直ちに曲に应用される。基本的には、横隔膜の支えを適切に出来る事である。5～8小節目は、練習が適量あって後、4小節分一息で歌う練習をする。24小節目の1・2拍目は、長いフレーズの最後なので、息の不足から声が不安定になりがちなので、19小節目4拍目からの練習は多く、また無理な場合は、21小節目4拍目でプレスを入れる。39、41小節目の16分休符は、プレス記号と思って歌う。43小節目から終わりまでのソは、*cresc・decresc*を、この曲にふさわしく穏やかに付ける。この曲は、息が苦しいからと、*tempo*を上げ過ぎては、曲想にそぐわない歌になってしまう。この13番を歌うまでに、息を長く保つ訓練が成されていなければならない。

14. 伴奏を弾いて曲想を掴む。先へ先へと元気よく、しっかりした足取りで進んで行くような感じで、またノン・レガートで生き生きと歌う。16小節目のアクセントは、横隔膜の支えと共に、確実な声が腹部から出てくるような感じで、音を確かめるように上行させる。25小節目から6拍半延ばすミは、堂々とした自信に満ちた声で歌う。次のプレスは遅れないように、素早く行う。自信を持って歌い慣れてきたら、このプレスを省いて、一息で28小節目まで歌う練習をする。29小節目の*forte*から*dim*して、30小節目から*smorz*にする時、声量の減衰をよく注意する。終わりのフェルマータのミは、声がおれないように、最後のフレーズの息の配分を慎重に行う。またこの部分は、多く練習して、息の支えの訓練をする。

15. 4小節のフレーズをよく考えて、歌をレガートにつづって行く。13小節目から16小節目のフレーズは、音が上下しているが、レガートに歌うことを忘れないように。17小節目からのシンコペーションは、*tempo*が早くなならないように注意する。17・19・21・25・27小節目のスタッカートが短くならないように、スタッカートの後の空白を、必ずプレスにする。45小節目のナチュラルの付いたソは、音高に気をつけて歌う。この旋律は、音程が狂いがちなので、遅い*tempo*で丁寧に音を取る練習をする。

16. 冒頭のスタッカート・アクセントの付いた音を確実にするため、初め*tempo*をゆっくり、支えをしっかり取りながら、三つの音を歌う。歌い慣れてきたら、次第に*Allegretto*の*tempo*に近付けて練習する。3小節目の三つの音も、同様に練習して、瞬間的に音程が正しく歌えるようにする。39小節目のレは、*forte*になりがちなので、前のドからこのレに向かって、*dim*の練習をする。上行する*cresc*は容易だが、上行の*dim*は難しい。特に男声は、喉頭の上昇した、いわゆるノド声にならないように注意せねばならない。

17. 1拍目スタッカートの付いた8分音符は、一瞬の*cresc*を速やかに行う。気持ちだけといった感じでもある。次の8分休符で、支えをしっかり整え、次のドを大きめに歌う。力み過ぎると音

が上ずる。また直ぐ *dim* に掛からねばならないので、力み過ぎない方がよい。3・5小節目も同様である。6小節目の3・4拍目は音程練習を多めにして、音取りを確実にする。24・28小節目のアクセントは、支えを一音ずつ確かめるように歌う。32・34小節目の2拍目のリズムは、音程を正しく、ドが下がり気味にならないように。また滑り落ちるような、音程の甘い歌にならないように注意する。付点8分音符と16分音符のリズムは、この曲の凡てについて、咽喉のコントロールをよく練習する。

18. 曲全体レガートを心掛ける。ブレスの前の音、特に4小節目の場合、少し早めに切り上げる。いっぱい延ばすと、ブレスの次の音の出が遅れる。素早いブレスを練習する。15小節目のソの音、16小節目のファの音は、伴奏音をよく聴きながら、確実に音を取る。転調をごく自然にとらえられるように、伴奏に心地よく乗って歌えるようになるまで練習する。33小節目のミのフェルマータは、*cresc・dim* を自然に付けられるように、この曲の終わりとして、柔らかく優美に歌う。

19. ゆったりした、穏やかな3拍子と思って、特に21小節目の1拍目が、ごつごつした感じにならないように、レガートに歌う。4小節目1拍目も同様に注意して、フレーズを締めくくる。11小節目の上のミは、1拍目のラからよく支えておいて、滑らかにミに上がる。ミにアクセントが着いたように歌うと、このフレーズを感じを損なってしまう。14小節目以後に現われる16分音符は、あわてないで、また音を疎かにしないで、咽喉のコントロールがよく出来て、鮮やかに歌えるように練習を積む。21小節目のド、22小節目のドの音取りに注意する。23小節目の16分音符三つは、初めに *tempo* を落として、音を正確に歌ってみる。その後徐々に早い *tempo* にして練習し、この曲の *tempo* に仕上げる。終わりのレは、呼吸経済をよく考えて、息を支える練習をする。

20. 活発に歌うが、付点のリズムの調子の良さに乗って、*tempo* が早くなってしまうように注意する。下行する旋律は、音を外し易い。音程が不正確になり易いので上行より音を入念に取る。歌い出しの前の付点8分休符は、ブレス記号と思い、歌う体勢を整える個所としてとらえる。15小節目、伴奏の無くなる3拍目から、転調を確実に意識する。ピアノの音に頼れないので、より慎重に音を運ぶ。39~41小節目は、伴奏音に溶け込むように、滑らかに歌う。50小節目からは、少し長いフレーズを息切れしないように、支えを大事にして歌う。61・62小節目の上行しながらの *cresc・forte* は、*tempo* が早くなならないように注意しながら、声は大いに自由な感じで歌う。

21. 歌い出しは、正に優美に、声を柔らかく使う。11小節目の32分音符は、声を早く動かさねばならないが、この四つの音と次のミまでを部分練習して、声の素早い動きを得たい。12小節目3拍目からの3連符が遅くならないように、*tempo* に気を付ける。14小節目の9度音程は、シを軽く歌い、ドをしっかりと、しかも柔らかく取る。このドにアクセントが付いたような唐突な感じの声にならないように。17小節目から現れる、スタッカート・シンコペーションは、*tempo* が早くなりがちなので、スタッカートの後の空白時にブレスして、次の4分音符を歌う。29小節目から、アクセントが次々に現れるが、直前の32分休符は、ブレス記号と考え、よく息の支えられた声でアクセントを付ける。32小節目のドが低くならないように、シャープをしっかりと取る。35小節目2拍目の増2度は、伴奏の和音をよく聴きながら、特にラに気を付ける。37小節目のアクセントは、一音ずつ支えを意識して、また声が荒くならないように歌う。42小節目からは、気持ちをなごませるように、レガートに歌う。

22. 4分音符の連なりを、素早くとらえる。4小節目のブレスは、次のシの出が遅れないように非常に素早く行う。13小節目は、音を外さないように、特にソに注意する。咽喉に力みがある

と、音程の狂いが生じ易い。sf とアクセント以外は、あまり力を入れないで歌う。29小節目から44小節目までは、上下に音がよく動くので、中・高声の響きの変化に気を付ける。37・38小節目と、41・42小節目は、それぞれ2小節ずつの音程練習を、ゆっくりした *tempo* から始め、徐々に早めの練習をする。曲が生き生きとした感じになるように歌う。

23. 伴奏音の響きに乗るように、柔らかく歌う。3小節目のシのオクターヴ跳躍を、スムーズにするために、支えは柔らかく保つ。9・10小節目の低い音は、鼻腔の響きを忘れてはならない。20・21小節目は、伴奏音が無いので、声が不安定にならないように、丁寧に音を取る。31小節目のブレスの後のミは、ブレスした直後で、勢い余って強過ぎる声にならないように、程よくブレスする。37小節目からの長い音符は、無表情な声にならないように、声の響きに生気を与えるように脹らみを柔らかく付けて歌う。

24. 初めの三つのアクセントは、支えをしっかりと保ち、決然と音を取って歌う。次のソからは、滑らかに歌わねばならないので、このアクセントの力みは、直ちに柔らげられねばならない。次に旋律の上昇に伴ない、徐々に力を加え、4小節目のミをしっかりと歌う。この4小節を多く練習し、支えの柔軟なコントロールを訓練する。33小節目から、長調の感じを、解放された大らかな歌い方で表現する。49～56小節目のフォルティッシモ・ピアノッシモの対比は、充分にマルカートに、レガートにそれぞれ表現する。68・76小節目からの *cresc* は、張り切り過ぎて、70・78小節目の8分音符に、勢い余ってくい込まないように、それぞれ注意する。

25. この付点音符の音型は、No・20のリズミックな歌い方と異なり、ゆっくりした *tempo* で、あまり鋭くなく、柔らかく取る。但し3連符と同じにならないように8分音符を適切に取る。7小節目から10小節目までのブレスは、やゝきつい。息の支えが大事である。24小節目の音程は、特にド・ラの音に留意する。29小節目の *lento, a piacere* は、*tempo* をゆっくり取り、30小節目は、更に徐々に遅く取る。32小節目までブレスを保つが、7～10小節目のブレスより息が長く要るので、繰り返し練習する。39小節目は、音取りをゆっくり確実にして、初めはアクセントを付けて歌ってみる。音取りに慣れたら、レガートに、また *dim* を掛けて歌う。練習の段階を守り、過程を大事にしたい。42小節目からは、声をよりしなやかに、44小節目のオクターヴ跳躍は、多めに練習する。

26. 8分音符のスタッカーティッシモは、気の抜けた声にならないように、*dim* しながらも、やゝしっかりと歌う。アクセントが付いた突き上げるような声にならないように切り上げる。各フレーズをよく見て、全体の流れを伴奏の音型でも分かるように、さらりと歌って行く。*dolce* の指示がよく出て来るので、更に注意して柔らかく歌う。49小節目のファは、響きを上方に向けて、鼻腔を意識して出せるように、前のドから声の響きを準備する。55・59小節目の8分音符は、軽々しい声にならないように、短い時間でも、確実に支えられた息で、しっかりと歌う。

27. 出だしの伴奏音を滑らかに弾いて、旋律をそっと乗せる感じで歌う。7小節目のファ（上の旋律）は、6小節目のブレスの時に、高声域に声を *change* する準備が成されているように。17小節目は、*tempo* が早くなりがちである。これは、スタッカートの後の空白の時間が、せばめられる為である。スタッカートの後に、短いブレスを入れ、時間が早まらないようにする。27・28小節目は、よく伴奏音を聴いて、音程を正しく取る。31～34小節目も同様に転調する音をよく聴きながら、16分音符をやゝ *cresc* しながらレガートに素早く歌う。38小節目の3拍目のソは、シャープを正確に取って歌う。

28. 歯切れよい伴奏音に乗って、生き生きと歌う。付点音符のリズムを No・20 と同様に、ノン・レガートで歌う。12・13小節目の音の跳躍が鮮やかに歌えるように、声の柔軟な動きに努力す

る。16~23・27~31 小節目は、伴奏音で分かるように、レガートに歌う。31~33 小節目の *rit* は、息の支えに充分留意して、息切れを起さないように。43・47 小節目のファは、荒い声にならないように、*dolce* の指示をよく守る。49・51 小節目のミは、*p* で更に *dolce* でリズムカルに、声を柔らかく弾ませて歌う。

29. *dolcezza* は、甘さ、快さ、穏やかさ、優しさ、いたわりという名詞である。これらの感情を持ってという指示であるので、たいへんレガートに歌わねばならない。4・5 小節目の 3 拍目のミは、高い声なので強くなりがちだが、柔らかく歌えるように、支えはしっかりと、声は力まずに練習する。7 小節目の装飾音は、8 分音符の長さの中に納めるように歌う。33 小節目からは、高・中・低声のコントロールを自在に行えるように、常に声の響きに注意しながら、発声器官を柔軟にして歌う。終わりのラは、初心者は無理な場合、下のラを使う。28 番までに上のソは使われていないで、29 番で突然ラなので、特にテノールは、準備としての高い声の発声訓練が大事である。

30. 指示してある *vivacita* は、活発さ、敏捷さ、鮮やかさという名詞で、優美に活発さをもって歌わねばならない。スラーのある部分は、スタッカートの直後でも、直ちに滑らかな声に出来るように練習する。スタッカートの後は、必ず素早いブレスを入れて、スタッカートの空白の部分の、時間的短縮をさけ、*tempo* が早まらないようにする。早くて短い間隔の呼吸で、声を鍛練する。

30~35 小節目のドの持続は難しいが、*dim* しながらの練習が、よりよい方法だと思う。35 小節目のドは、2 小節目の 8 分音符と異なり、4 分音符であるので注意する。

31. *cresc・dim* の適切な表現に努める。初めの付点 8 分音符を *cresc* しながら、大きくした声量で次の 16 分音符に移る。次の 4 分音符の歌い始めは大きく、1 拍の経過の間に *dim* し、次の 8 分音符を更に *dim* する。これを初めにゆっくりした *tempo* で、一つの母音で数回歌って、その声量の増減を自然にする。息の支えも増減を適切にして、機械的に声だけ強弱する冷やかな表現にならないように歌う。指示する言葉を加えるとすれば、暖かい声で、と記したい。*Var・I* は、音の移動が早いので、出だしのレ・ファはあまり力を入れないで軽く歌い、上のレに向かって、程よい力で上昇するように歌う。18 小節目 3 拍目の 3 連音も、同様にして、下の声から力まないように注意する。24・27 小節目は、*tempo* を遅くして、音程練習から確実にして行く。*Var・II* の 16 分音符は、初めゆっくり歌い、徐々に早い *tempo* にして歌う。39・41 小節目の装飾音符は、特にこの練習を順に行う。充分時間をかけて練習し、早い動きを習得する。

32. 8 小節目歌うと、正に *grazioso* 優雅に表現したくなる感性を持ちたい。休符の前の音が、短くなり過ぎないように、各フレーズの歌い納めを丁寧に。休符が多いが、その度に、旋律が途切れたようにならないように。31 小節目は、音程練習を確実にする。32 小節目の *sf* は、荒い声にならないように、柔らかい *forte* という感じで歌う。あくまでも *grazioso* 優美な表現を考えて歌う。

33. *sotto voce* の指示は、初心者はあまり気にしないで、やゝ柔らかい声と思って歌う。特にテノールは、上のファが咽喉を締めつけかねない。自然に柔らかくと思って歌う。25 小節目からの 16 分音符は、柔らかく早く動かせるように多く練習する。51 小節目からの長いドは、息の支えと共に、声の響きをそっと乗せて、息を少しづつ使い持続させる。終わりのラも同様に、息の使い方を慎重にして歌う。

34. 2 拍目のアクセントが強過ぎて、荒い声にならないように、1 拍目の半拍の音を、息の支えを確かに保ちながら、短い息と共に声を出し、次の 8 分休符のブレスで、再び息をよく支え 2 拍目を歌う。また口先だけで歌うような声は、この曲の練習目的を損ない、無駄に終わりがかねない。1 拍目と 2 拍目の音型で、横隔膜からの正しいアクセントの歌い方を確実に練習する。

35. 装飾音符が多く出て来るので、咽喉を少し弾ませるようにして、軽やかに歌う。9小節目は、スタッカートの空白の時間が短くなり、*tempo* が早くなならないように、息を瞬間的に止めるか、短いプレスをする。29小節目からは、よりレガートに、表情豊かに優雅に歌う。
36. 14・16小節目の *cresc* は、自然な感じで脹らみを持たせる。上下に音がよく動くので、上の声の支え、下の声での支えを素早く柔軟に出来るように練習する。シンコペーションは、よくリズムに乗って、弾むようにアクセントをしっかりと付ける。アクセントの次のスタッカーティッシモは軽く短く弾んだように歌う。
37. 付点音符の次の16分音符を、鋭く入れられるように、支えを瞬間的に弾ませるように、生き生きと歌う。ノン・レガートに、はっきりと音を取り歌う。21・22小節目は、*cresc* であるが、23小節目から、急に今までより柔らかかに歌わねばならない。*dolce* の指示をよく守る。1拍目の8分休符でのプレスを、2拍目のファを意識し過ぎて、精いっぱいプレスしてしまうと、柔らか味が出難い。程好いプレスで、高いポイントの声を出す体勢を取って歌う。
38. ゆっくりした *tempo* なので、気が緩んで、3拍目のリズムが、3連符にならないように気を付ける。17・18小節目、21・22小節目は、*cresc・dim* に気を付け、1小節かけて、自然に徐々に脹らみ、また徐々に萎むようにレガートに歌う。27小節目は、下降する音をしっかりと確かめながら練習する。上行よりは、下行する旋律の方が、音が外れ易いので注意して歌う。
39. 22小節目は、10度の跳躍であるが、*forte* で歌い易いが、次の小節は急に *p* である。ミを3拍延ばす間に、声質の変換をよく準備せねばならない。30小節目も同様に、*forte* から *piano* へ、素早く声が変わられるように、一つのテクニックとして練習する。33小節目からの付点音符の音型は、よく弾みながら歌い、スタッカートの後は必ず短いプレスを入れる。
40. 5小節目の *sf* は、低い声としても、鼻腔の響きを忘れないように、胸声のみの荒い声は良くない。また3拍目は直ちに *dolce* で歌わねばならないので、声のポイントを鮮やかに変換出来るように練習する。曲の後半は、付点のリズムと3連符のリズムを、はっきり区別して、しかもレガートにゆったりと流すように歌う。
41. 半音上げたり下げたりの音程が、甘くならないようによく音高を取り、レガートに歌う。後半の付点のリズムと3連符のリズムを、はっきり歌い分ける。23小節目からのフレーズは、息を長く使うので、息漏れしないように、支えで声の響きをよく乗せるようにして歌い、息を節約する。終わりのフレーズは、*lento* の指示を守り、ゆったりと音を運び、気持ちを落ち着かせるようにソを歌い終わる。息の支えが、この41番までに、次第に鍛錬されるので、更に上達するように、息の苦しいフレーズは繰り返し練習する。
42. 一つ一つの音をよく保ちながら、滑らかに優美に歌い上げる気持ちで歌って行く。16小節目の2拍目の16分音符は、3連符とはっきり区別して歌えるまで、声をよく訓練する。26小節目からの伴奏の変化をよく聴きながら、堂々とした声で歌う。28小節目のオクターヴ上がったファは、テノールは特に気をつけて、上の声の響きへの変換を行う。アクセントの付いたシンコペーションは、*tempo* が早くなりがちなので、気持ちを落ち着かせ、音を確認するように歌って行く。49～51小節目は、何回も歌い、息をよくコントロール出来るように訓練する。
43. 学習者によっては、*sotto・voce* は大変難しい。特にテノールは、場合によっては喉頭の上昇した苦しい状態になる。息の支えを更に慎重に行い、声が不安定にならないように練習する。
44. 咽喉に力が入っていると、32分音符が早く動かない。前の4分音符と、次の32分音符4個だけ取り出して、繰り返し歌い、氣息の支えと咽喉の動きを、よくコントロール出来るようにする。先ず10小節目の低い音での部分練習から始め、次に4小節目の、次に2小節目と、次第に高い位



置に移して練習する。すでに 43 曲学習して来たので、終わりのラは、テノールも自信を持って歌ってみる。声区の変換は、顔面上部に向かって、額に声の響きを集中する気持ちで行う。ラのための発声練習も充分に行う。

45. 臨時記号、転調が多いので、音程を正確に取るため、初めは遅い *tempo* で歌う。音取りが出来たら、勢よく先へ先へと進むように歌う。25~32 小節目はレガートに、33~47 小節目は *f・p* の対比に注意し、横隔膜の支えを *piano* の箇所も、疎かにしないで歌う。

46. 先ず前奏の 4 小節を弾いてみて、この曲の性格を掴めねばならない。穏やかで優美な旋律を、優しい声でつづらねばならない。特に指示されている *dim* は、すべて大事に、またフレーズの終わりの 8 分音符は、スタッカート気味に短くしないで、この音符の長さを確かに保ってから切らねばならない。28・30 小節目のスタッカートは、2 拍目の *sf* は、中音域のせい、強く声を使うと、音高が上ずり易い。中音の *f* を改めて練習するチャンスである。

47. 早い *tempo* で歌うが、初めは 3 連符の音を確かめるようにノン・レガートで、特に下行する 3 連符は音高に気を付けて、決然と突き進むように歌う。27 小節目から伴奏音型で分かるように、流れるようにレガートに歌う。33 小節目の前打音は、4 分音符に取る。40 小節目も同じである。この曲後半は長い息で歌うので、氣息の訓練になる。

48. 連続する 16 分音符を素早く歌うには、支えを安定させて、あまり力を入れ過ぎないで、程好い勢いで音をつなぐ。*tempo* が早いので、音程によく注意しないと、音がすべり易い。初めはゆっくり歌い、徐々に早い *tempo* で練習する。17 小節目から、穏やかな波に身を任せるような気持ちで歌う。45・46 小節目は、音程が甘くなり易いので、特にシャープの付いた音に注意する。

49. レガートに *TEMA* を歌う。7・15 小節目の 2 拍目のリズムは、穏やかな感じに取る。ここの鋭いリズムにすると、ちぐはぐな感じになる。*Var・I* は、*tempo* をよく正確にして歌う。シンコペーションにより、前のめりの *tempo* で早くなってしまうように。横隔膜の支えが、アクセントの連続で更に重要になる。力を入れ過ぎないで、弾み過ぎないように歌う。*Var・II* はレガートに歌う。音程が甘くなり易いので、40・41 小節目は、特によく音程練習をしてから歌う。51 小節目フェルマータは長めに歌い、次のドから、ゆっくり時間を取りながら歌う。

50. 今まで修得して来た声楽技術を駆使して、デュナーミク・アゴーギグ・声の使い方を適切に行い、終曲らしく歌われねばならない。前奏で分かるように、激しい感じで、またアクセントの箇所は、音を確かめるように声を使う。8 小節目の装飾音は、前のシを拍の後半でやゝ緊張を緩めて、次のド・シ・ラを軽く素早く動かす。緊張したまゝだと、咽喉のコントロールが難しい。

12・16 小節目の装飾音の方が、1・8 小節目の音より低い位置にあるので、歌い易い。これを先に練習しておく方法も良い。25 小節目から 30 小節目までの長いブレスは、終わりを確かに *rall* して歌えなければならない。第 50 曲目で息切れを起こしてはならない。37 小節目のファは、次のオクターヴ高いファを気にし過ぎて、不安定になったり、声が上ずったりしないように気を付けて歌う。38 小節目のファは、鼻腔に声の響きを持たせ、勢いよく歌う。43 小節目から、気持ちを変え、明快に、軽くスタッカートを取りながら、柔らかく歌って行く。長調の表情を、よく表わすように歌う。63・64 小節目の脹らみは、優美に処理する。78 小節目からのファは、中音域で息が抜け易いので、氣息・咽喉のコントロールを慎重に、*forte* から *dim* する。

## おわりに

声は多種多様であり、また個人により感情の持ち方、表現も様々である。柔らかいと思いついでいる者も、他者が聴くと固く思われ、また逆の場合もあり得る。*forte* も人によっては、*violenza* (暴力的) な声に成りかねない。*ff* でも美しく、荒々しくない響きの声を出せるように時間をかけて練習せねばならない。このコンコーネ 50 番は、人によるが、1 年または 2 年、また曲を繰り返し練習するなど、声楽の基本的訓練に、大いに利用したいものである。指導者によっては、この曲集に 3 年の練習期間をおいている。イタリアのパルマ音楽院では、1 年生でこのコンコーネ 50 番を授業に用いる。デュラン版を元にした教本が、よりオリジナルであるが、現時点ではリコルディ版、ペータース版に準拠した教本が一般的なので、これ等を用いた。

## 参 考 文 献

- 1) コンコーネ 50 番, 中声用, 城多又兵衛解説, 音楽之友社, 1980
- 2) コンコーネ 50 番, 中声用, 畑中良輔編, 1990
- 3) コンコーネ 50 番, 中声用, 原田茂生編著, 教育芸術社, 1987